
とある作家の編集と

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある作家の編集と

【Zマーク】

N2152M

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

締め切りを前にも一向に原稿を書けないとしないダメ作家に、しごれを切らした担当編集はある提案をする。会話文で進むオール会話文小説。

(前書き)

この作品の90・9%は会話文となつております。会話文アレルギーの方、会話文性胃炎の方は服用をお控えください。

「先生、ところで原稿の方は……」
「ああ、原稿ね、原稿。そうだな、もつと少しつてといろかな。締め切りまでにはね、なんとかできるよ」
「……先生、ホントは一行も進んでないんでしょう?」
「なんだと、君ね、僕はこう見えても若手の有望作家だよ。一行も書けてないなんてことがあるかよ」
「じゃあ、出来てるんですね」
「い、いや、それはね。その他にもね、色々仕事があつてね忙しくて首が回らないというか」
「つまり?」
「一行も書いてないです、すみません」
「ふう、そんな事だらう?と思いましたよ。まあいいですよ、私にいい考え方があります」
「へえ、それはどんな」
「まあ、聞いて下さい。なにもね、400字詰めの原稿用紙を全部先生の文章で埋めなくともいいんですよ」
「どうこいつことだい?それじゃあ僕の作品じやくなくなつたりじやないか」
「いえいえ、大丈夫ですよ。『評論』とこいつ形を取ればいいんですよ」
「評論?」
「そう。誰か著名な作家の作品をそのまま載せて、先生はそれに解説を加えればいいんですよ」
「でも僕は評論なんて書いたことないぜ」
「本文をそのまま全部載せて、解説を適当に書こいやえばいいんですよ。それに評論の題材もこの本ですし」
「はあ、随分と年代物の文学全集だね。一体誰の作品なんだい」

「〇・M先生ですよ」

「お、〇先生だって！そんな僕でも知ってるような大先生の作品を使つたらさすがに危ないだろ」

「大丈夫ですよ。これは〇先生の翻訳本、それに原作の外国人作家は専門家も知らないくらいの無名作家ですから先生がどんな下手くそなもの書いたって誰も文句はいいませんよ」

「下手くそな文章で悪かったね」

「それに無名作家が先生のお蔭で田の畠を浴びることになるんですから」

「そうだな、僕がその無名作家の発掘者になるかもしねいんだな」「そうですよ。ま、とにかくこの本を貸しますからとつと今月号分の原稿書いちやつてください」

*

「で、あれから一週間経ちましたけど出来ましたか」

「ほら、これだ」

「どれどれ……うむ、なかなかいいじゃないですか」

「……あ、そう」

「どうしたんですか、元気ないですよ」

「……今日は仕事が立て込んでて……もう疲れた……死にたい」

「本気で死にそうだからやめて下さい」

「……」

「じゃあ、私はこの原稿持つて帰りますけど先生は早く来月号の原稿書いて下さいよ」

「えー、仕事したくないー」

「仕事しないと貧乏なままですよ。飢え死にしますよ」

「んー、さすがに飢え死には嫌だ」

「じゃ、再来週までに原稿お願ひしますよ。ちやつちやと書いた方がいいでしょ」

「えー」

「さつさと仕事しないと原稿料出ませんよ」

「くつそ、この鬼編集ー」

「はいはい、それじゃまた」

*

「先生、これは……」

「いやー、書いてたら何かノッてきてね。書き出したら筆が進む進む」

「いや、さすがにこれは」

「えー、何しても大丈夫って言つたのは君じゃんか」

「それはそうですが。どうしてこうなったなんですか、勝手に話の続きをなんか書いて」

「二次創作と言つてもらいたいね」

「もう原形とどめてないじゃないですか。何で原作者の外国人が作品に登場しちゃってるんですか」

「いやいや、きっとこの作品は原作者の無意識の深層心理を体現しているのだとね、そう僕は考へているのだよ」

「わけわからないこと言わないで下さいよ。じゃあこの女性関係でグダグダな主人公も先生の深層心理を表してるんですね。確かに言われてみれば……」

「うるさいな。書き直しはなしだからな、じゃないともうお宅じや書いてあげないよ。いいのかな、人気作家が一人減っちゃうよ、雑誌の売上落ちちゃうよ」

「うう、わかりましたよ載せますよ。載せりゃいいんでしょ」

「やつ書つことだよ。わかつたらひとつと原稿持つて出版社に戻りな

な
な
「きこー、クソー」

*

「先生、なかなか評判がいいですよこの連載。もう原作への忠実さなんて微塵も残つてませんが逆にこっちの方がよかつたのかもしないですね」

「そうだろそうだろ。なんてつたつて僕は人気作家だからね」

「他の作品も順調らしいじやないですか。全部パロディーですけど」「なんだつて？」

「いえ、何も」

「パロディーじゃなくてオマージュと呼べ、オマージュと。ちょっと名の知れた作品から創作のヒントを少しばかり拝借しただけだ」「はあ、そうですか」

「大体、小説にしろ芸術にしろ世の中の作品は何かしら昔の作品のオマージュに違いないのだ。それでいて自分なりの哲学やら人間觀やらを組み込む。それが芸術家というものなんだよ」「まあ、それはいいですがオチはどうするんですか」

「何のことだい」

「この作品のオチですよ、最終原稿ですよ」

「え、原作通りでいいんじやないの」

「ここまで原作をいじり倒しておいてそりゃないでしょ」「じゃあどうすりやいいんだよ」

「知りませんよそんなこと。それを考えるのが先生の仕事でしょうが」「何だと、もとはと言えば君が書けって言つたんじやないか

「確かに言いだしつへは私ですけど、原作をここまで引っかき回したのは先生なんですよ。さすがにオチは責任持つて考えて下さいよ」「うむむ。おっともうこんな時間か。悪いね、人と会う約束をするんで僕はこの変で失礼させて貰うよ」

「ついでにその人にオチでも考へてもらつたらどうですか」

「はは、それも良いな。まあ、何とかしてみるよ。なあに大丈夫、僕は天才作家だからね」

*

あれから数週間後、僕は最終稿を担当に渡した。

作品の人気はそう悪くなかったとは思うのだが、よくわからない。少なくとも人々の話題に上ることはなかった。

傑作と讃える声も、原作レイプと罵る批判の声も聞くことはなかった。

まあ、僕としては他の作品で稼いだからそんなことはどうでも良いのだけれどね。いや、ちょっと失礼。またあの小づるさうい編集が来たようだ。それでは皆さん、またいつか。

『とある作家の編集と』完

(後書き)

元ネタ：太宰治「女の決闘」

オマージュというよりパロディーだな。
元ネタとは言つものの似て非なるもの、といつか全くの別物。似て
すらない。

そう、だからその右手に持つた生卵や左手で握っている石を私に向
けないでほしい。お願いだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152m/>

とある作家の編集と

2011年3月20日03時55分発行